怪物と餃子

かよきき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
怪物と餃子

【Ｎコード】
Ｎ８６０７Ｉ

【作者名】
かよきき

【あらすじ】
食いしん坊で無邪気（むじゃき）な怪物の、ちょっと心温まる物語。

1話（前書き）

ちいさいお子さん、ちょっと疲れた人。そんな方にどうぞ。

1話

「バキバキドドー」
大きな音を発てて橋が壊れました。
「へっへっへっ　人間はなんてバカなんだ。
オデがこんな簡単に壊せるもどしか作れないんだかだ　ワハハハ」
大きな体を揺らして怪物は笑いました。
この怪物は村の外れに住んでいますが、いつから住んでいるのか、どうしてそこにいるのか誰も知りません。怪物本人さえも知りません。　イタズラ好きの怪物はつまらなくなると人間の作った物を壊して遊んでいました。
　そんな怪物に村人は困り果てていました。
退治しようにも怪物にはとても歯が立たないし、説得しようにも聞く耳持ちません。村人は仕方なく壊された橋や家をせっせと直すで精一杯でした。

1話（後書き）

携帯向けに話をすこし区切って掲載してみます。
ちょとホッとするお話です。

2話

怪物は美味しいモノには目がありません。
どんなに険しい崖に生えている花でも、どんなに川底深く住んでいる魚でも、どっんな場所でも、美味しいモノを食べにいきました。
「今日は何を食べようかだぁ」
おなかを空かした怪物が、山に帰ろうとすると向うの方から、美味しそうな匂いが漂ってきました。　ぐうううう～
「へへへへ　美味そうな匂い　へへへへ」
匂いの方に行ってみると、子供が一人美味しい匂いのする包みを持って歩いていました。
「おい！子供。その美味そうな匂いの包みをオデによこせ」。
子供は恐がりながらも包みを隠しました。
「コレはお前が壊した橋を直してる、お父とお母に作った大事な餃子だ。お、お前なんかにやるもんか！！」
怪物はよだれをダラダラと垂らしています。
「ギョウザ？　美味そうだ　じゅるる」
子供の足つまんで、宙吊りになった子供から包みを奪い取り開いて口の中に放りこみました。　怪物は目をトロ～ンとさせました。

2話（後書き）

怪物がどんな姿をしているか・・あなたの心に映った怪物がそのまま怪物です。

3話

「ほわあああぁぁぁ」
思わずため息をつくほど美味しい。子供はギョウザに夢中になっている怪物の腕から逃げ出しました。
「もっと食べたい。ギョウザ・・もっと」

急いで逃げ帰る子供が振りかえると怪物が追ってきます。子供は一目散に走りました。怪物の手が子供の背中につきそうになった時、子供はなんとか家に入れました。家中の鍵、雨戸、カーテンも閉めました。
「これで大丈夫・・・」
子供がほっとして胸を撫で下ろしていると恐ろしい音がし始めました。家中の家具や壁が揺れ始めました。
ズガガガーーーーーン!!

怪物は床を残して家の壁ごと持ち上げました。子供はビックリ!
「ギョウザ　もっとよこせ子供」
子供は泣きながらも抵抗しました。
「お前なんかに作ってやるか!お前ののせいでお父もお母も働きっぱなしなんだぞ!」
子供の言葉に怪物は大笑い
「フハハ　人間バカ　オデが一振りで壊してしまえる物、何日もかけて作る。バカバカ」
子供はよけい怒りました。
「絶対お前なんかに作らない!帰れ!!」
怪物は持っている家を戻して言いました。
「わがった・・・」

3話（後書き）

作者は餃子が大好きです。

4話

そういうとすんなり山道を帰って行きます。
素直に帰ったので子供も意外でした。早速餃子を作り直しました。
小麦粉に少しの塩とお湯と油を入れ練り始めます。子供が夢中で餃子を作っていると怪物はそーっと戻って来ました。窓からじーっと餃子の作り方を見ています。
（子供が作ってくでないなら自分で作るど）

作り方を覚えると急いで帰り、餃子を作りました。肉を練ってニラを切って、味噌を入れて・・・怪物も夢中で作りました。そうしてギョウザは出来あがりました。子供が作ったのとほとんど変りません。ニンマリして食べて見るとなぜかそれ程美味しくありません。見た目は同じなのに・・・何度作っても上手くいきません。怪物は困りました。こんなに困ったのは生まれて初めてです。
　次の日の朝、子供が目を覚まし歯を磨いていると窓に大きな目が見えました。ビックリして窓を開けると困った怪物がいました。

「ギョウザの作り方、教えてくで」
怪物は一生懸命頼みました。最初は断っていた子供でしたがあんまりしつこい怪物に子供も困ってきました。
「それじゃあ、お前が壊した橋や家を全部直してきなよ。そうしたら教えてやる」
子供がそう言うと怪物は笑い出しました。
「そんな簡単なことでいいのか？あんなに簡単に壊せる橋や家なんてすぐ作れるど」
怪物はドカドカと橋に向かいました。

4話（後書き）

作者は餃子が好きで、実は餃子屋さんまでやっています。

5話

橋を直している村人たちは怪物が手伝い始めたのでビックリ。怪物は力持ちでどんな木材も鉄一人で運べました。早く餃子を食べたい一心で怪物は頑張りました。こんなに頑張ったのは生まれて始めてです。しかしそれでも橋はなかなか完成しません。夜は怪物が壊した家の修理を手伝いに行きました。家もちっとも直りません。怪物は汗を一杯かいてとっても疲れました。

「こんだに疲れるなんて・・・」

怪物はなんだかとっても人間に悪い気持ちになってきました。何日も何日もかけてやっと
完成しました。怪物は急いで子供の家に餃子の作り方を聞きに行きました。子供もまさか怪物が最後まで手伝うとは思わなかったのですが約束なので教えてあげる事にしました。

「じゃあ、とりあえず作ってみなよ、教えてあげる事があったら教えてあげる」

せっかく直した家に怪物は大きすぎて入れないので外で、怪物は自分の知っている餃子の作り方で作りました。子供はそれを見ている内にびっくり自分の作り方と全く同じだからです。教える所なんかありません。

出来た餃子を怪物は食べてみます。やっぱり
あの時の子供が作った餃子ほど美味しくありません。怪物は子供を、見つめました。

「う～ん・・教える所なんか何にもないよ」

怪物は怒って子供に迫りました。

5話（後書き）

餃子の皮は小麦粉、ラード、塩、お湯（水でもＯＫ）で耳たぶほどの硬さまで練るのですよ。

6話

「そんなハズないど！本当に教えないとお前を食っちまうど！！」
怪物の顔に子供はおびえました。
「本当に教える事なんかないよ・・違うといえば、僕はあの時お父とお母の体を思って作った。だからお前もきっとお前のお父とお母の事を考えて作ればいんじゃないかな」

「・・・・・・・・・」
そう言われると怪物は呆然としました。
だって怪物にはお父お母もいません。怪物は突然とてもとても寂しくなりました。怪物は肩を落としトボトボと山に帰りました。

それ以来、怪物は滅多に山から降りなくなりました。怪物は寂しくて寂しくて背中を丸め空を眺めて暮らしていました。
しばらく経ったある日、嵐がやってきました。何百年に一度の大きな嵐です。
子供や村人達は大忙し。この強い嵐の雨や風で次々に家や建物が壊れはじめていたのです。せっかく元通りになった建物や家を守るため皆で家を補強したり修理しています。
しかし、この風の前では人間の力なんて歯が立ちません。風に飛ばされた大木が子供の家にむかってきました

6話（後書き）

やっぱり餃子にはにんにくが入ってる方が好きです。

7話

当たる！子供や村人が覚悟した時、大きな手が大木を跳ね飛ばしました。怪物です。

「オデが直したモンだ・・・」

子供が怪物を見上げると怪物は大きく大きく息を吸い込みました。すると大きな体がどんどんもっともっと大きくなりました。村を覆い尽す程大きくなったのです。大きく強い嵐は、次々に大木や石や岩が飛ばしてきます。しかし全部怪物の大きな大きな背中で防ぎました。怪物が体を大きくしている内に村人達は必死に家や建物を修理しました。

嵐は1晩中続きました。村人にとってとても忙しく大変な夜が明けると真っ青な空が広がっていました。怪物はようやく息を抜きました。怪物にとっては大したことではありません。気付くと村人はヘトヘトです。

7話（後書き）

具は豚肉、キャベツ、にんにく、にら、塩コショウ・・・

8話　最後のお話

怪物は前に修理を手伝ったのでどんなに疲れるか知っています。せめて何か食べさせてやろうと思いました。怪物は山に帰ると餃子を作りました。知っている料理はこれだけです。元気になるように沢山、何百人分も作りました。そうして村人にギョウザをふるまいました。みんな喜んで食べました。みんな美味しい美味しいと食べ、子供も食べました。　怪物はそれを見届け帰ろうとした時、子供が怪物の前に来ました。

「ありがとう！！」

怪物はビックリしました。生まれて初めてお礼を言われたのです。村人達は怪物を囲みました。「ありがとう！！」　「ありがとうございます！」　「サンキュー」「ありがとう」

たくさんの、沢山の「ありがとう」。

　怪物は目が熱くなってきました。目から水が出てきました。でもなんだかとっても嬉しくてたまりません。こんな事は初めてです。子供が人だかりをカキわけギョウザの皿を持って怪物の前に来ました。

「食べてみなよ。君の作った餃子だよ」

怪物はちょっとためらいながらも、皿に乗った自分で作った餃子を食べて見ました。

「！！」

あの時、初めて食べた時と同じ味！！

怪物はニンマリ！！　子供もニンマリ！！

村人も全員、ニンマリ！！

　それから、怪物は村の外れに餃子屋さんを開き、村人は家族と同じようにつきあい怪物は幸せに暮らしました。

いつまでも、いつまでも・・・・

終わり

8話　最後のお話（後書き）

丁寧に皮に具を包んでゴマ油で焼き上げたらおいしく頂く・・・最高です。
どんなにおいしい餃子屋さんでも家庭でお母さんと作った餃子にはかなわないかもしれません。
稚拙な文章でごめんなさい。　感想などありましたら、なんでも送っていただければ感無量です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8607i/

怪物と餃子

2010年10月11日05時39分発行